

名取老女物語

II-6

東北の熊野信仰の中心的存在である名取熊野三社(新宮、本宮、那智)の勧請について「名取老女」の物語が昔から地元で伝承されています。

その伝承によれば、昔、陸奥国の名取の地に一人の巫女がおり、深く熊野権現を信仰し、毎年紀州熊野に参詣していましたが、年老い、参詣できなくなったので付近に小さな熊野三社を建てお参りしていました。その後、紀州熊野権現のお告げにより、熊野の山伏が一葉の種の葉を携え訪れました。この葉には虫が喰ったような跡があり、それをたどると「遠道し年もいつしか遅いにけり 思いおかせよ我も忘れ」という和歌が書いてありました。その和歌を熊野の山伏が老女に見せたところ感激し涙を流しました。これまでの老女の信心深い行いからその徳が広がり、保安年間(1120~1124)に今の熊野堂と吉田に熊野三社を勧請しました。』と伝えられています。このよくな名取老女の徳を認んで、文化8年(1811)地元の人々によって建立されたのが名取老女の碑です。ここでは老女の健闘にあやかり、草鞋や草履を奉納する風習があります。

名取老女に関連する文化財

- 下栗田の熊野三社
高麗の熊野三社を勧請する由に建てたといわれる下栗田地区にある本・新宮・那智霊社のこと
- 熊野神社(新産社) 老女の姿
熊野神社本殿(奥の扉)の西側にある名取老女のお姿
- 鳥居跡
紀州の熊野社で勧請をよこした名取老女を崇拝まで運賃した神鳥を祀ったお姿
- 老女神社跡
老女の遺徳をたたえられることにより建てた神社。明治42年国府村神社に合併

II-6

熊野信仰とは

熊野三社に起源をもつ熊野信仰は、熊野の自然を信仰化した自然崇拜の形態で、奈良時代にその起源があるとされる。

仏教と神道が神仏習合で結びつきを深め、浄土信仰が盛んになってくると本宮の本地仏を阿彌陀如来とし、熊野の地を阿彌陀の浄土として考えられるようになってきた。以前から神職者が修行場として訪れることはあったが、平安末期になると皇族貴族が盛んに参詣にくるようになりやがて有力な武士の層にも広がっていく。鎌倉時代以降こうした武士たちの参詣などに伴って熊野信仰は全国に広がっていき、長年の間に浸透していくことになる。

現在でもなお、民間信仰として、安産の神や海上交通、交通安全あるいは病氣や難よけといった時々々の信仰がつついている。

II-7-①

悠久の熊野三山



熊野本宮・速玉・那智大社の三社の総称熊野は古くから聖地・他界とされ、三山別々の発祥と信仰をもってきました。平安時代には本地垂迹説や浄土信仰が進展し、熊野信仰が高まりました。

熊野三所、十二所権現として、三山それぞれに共通の神仏が祀られ、三山三所制度が確立されました。



II-7-②

熊野本宮大社の由緒

熊野本宮大社は、第十代崇神天皇の六十五年には社殿が創建されています。主祭神は、家津美御子大神(美速嶋尊)で、海原を治められた後、出雲の藤の川上流にお降りになり、園土の終宮に宿たられたとともに、速く大陸をも治められたと伝えられ、紀伊熊風土記には「天神御身の御毛を掻きて、種々の木を生じ給い、その八十木種の播生れる山を熊野とも木野とも伝えるより、熊野奇霊野木野奇と称へ奉るべし」と記されています。



熊野本宮大社(本宮)

このことから、紀の國(紀州)の名の起りは、木の國から転じたものとされています。また、大神の御神地は、天照大神との御誓約を違えずお果たしになったことに由来し、「聖約の神」として、また、正邪を正す神として崇められ、特に、浄土信仰との融合を果たした中世以降は、熊野大権現、角玉大明神と称えられて、国土の開発経路・救霊誓約・精進興業・交通・造船・大造、大陣和合等の守護神として、また、長寿の神として、皇室および国家の縁遇を蒙り、第五十九代宇多法皇の御参詣に始まる嵯峨上皇女院の「熊野御幸」が百度に及んだのをはじめ、万民に広く尊ばれ、今なお日本一根本大霊験所と更に聖地の地として認められています。

II-7-③